

スーダン遺跡紹介、第5回

『スーダン遺物紹介』 第1回 タハルカ王のシャブティ

坂本麻紀（アラブ調査室研究員）

はじめに

私は紀元前8～7世紀頃に古代エジプトを支配していたスーダンのクシュ王国（Kush）に関心があり、エジプトの歴史では「第25王朝（クシュ朝；716–656 BCE）¹」と呼ばれているお墓を中心に色々調べています。クシュ王国のことをもっとみなさん知っていただけるよう、今回はクシュ王の中で私の一番お気に入りのタハルカ王（Taharqa）²（図1）のお墓から出土した遺物を紹介したいと思います。タハルカの墓はスーダンの「ヌリ（Nuri）」という墓地遺跡にありますが、タハルカを含めた第25王朝の王たちの墓地については別の機会に紹介します。

みなさんはシャブティ（shabti）³というミイラの形をした小さな人形（小像）を知っていますか（図2）？古代エジプトに関心のある人は「あの世で自分の代わりに働いてくれる人形のことね」というように、エジプトでは良く知られた副葬品の1つです。このシャブティの役割と、なぜスーダンのお墓からエジプトのシャブティが出土するのか、タハルカのシャブティがどのような特徴をもっているのか、ということについて紹介します。

尚、今回、エジプトの年代については「大英博物館ミイラ展：古代エジプト6つの物語」（朝日新聞社、c2021–2022）を参考しました。



図1 ライオンスフィンクス姿のタハルカ王像
(大英博物館所蔵) 筆者撮影



図2 タハルカ王のシャブティ(左)
(ペンシルベニア大学所蔵)
※アメリカ自然史博物館にて筆者撮影
右はシェンカマニスケン王のもの

1. エジプトの死生観とシャブティ

日本では古代文明に关心を持つ人が多くいますが、なかでもエジプト文明はとても人気が多く、私も去年、今年とコロナ禍に日本で開催されたエジプト展にいくつか行きましたが、どこの展覧会も多くの人で賑わっていました（東京は終了していますが、他の地域ではまだ開催中の展覧会があります⁴⁾）。エジプト展では、ミイラや美しい装飾が施された人型棺、装身具など、お墓から見つかったものが展示の目玉となっていますが、これらは古代エジプトの死生観と結びついているといえます。今回ご紹介するタハルカ王のシャブティもその1つです。

エジプト人は「死後の世界」があると信じており、死者は死後、様々な困難が待ち受けた旅を行い、神々の審判を経て再生（復活）し、葦の野（Fields of Reeds, イアルの野:Fields of Iaru）と呼ばれる地で永遠の生活を送ることができますと考えていました。あの世は神々が支配する土地であるため、現世で王であった人物でも農作業に従事し、神々に供物を捧げる必要がありました。そのような労働を回避する手段として、自分の代わりに働くシャブティと呼ばれる人形が王や高官のお墓に入れられるようになったと考えられています。

シャブティの役割は時代によって変わり、初期は死者自身の姿を表した人形だったのが、古王国時代末（Old Kingdom, 2686–2181 BCE）には死者自身の姿をした召使人形となります。そして中王国時代（Middle Kingdom, 2055–1650 BCE）の第12王朝（1985–1795 BCE）からはミイラの姿で表現されるようになり、死者の代わりに労働を行なう召使の役割とともに、シャブティが主人である死者自身を表わすようになります⁵⁾。そして、新王国時代（New Kingdom, 1550–1069 BCE）の末期から第3中間期（The Third Intermediate Period, 1069–656 BCE）の初めにかけて、シャブティは単なる「召使」や「奴隸」とみなされるようになり、製作者から購入することができるようになります。個人的要素を除いたシャブティが大量生産され、墓の副葬品として何百体も入れられるようになりますが、面白いのはシャブティに「労働者」と「監督者」があり、労働者の役割を持ったシャブティはミイラの姿で表わされ、監督官の役割を持ったシャブティは生きている人の姿で表わされたという点です。



図3 トトメス4世のシャブティ
(ボストン美術館所蔵) 筆者撮影
※トトメス4世は新王国時代第18王朝の王で、ツタンカーメンの曾祖父にあたる。



図4 Djedmutesankh の大量のシャブティ
(メトロポリタン美術館所蔵) 筆者撮影
※Djedmutesankh は第3中間期第21王朝のテーべのアメン大神官の娘で「アメンの歌い手（Singer of Amen）」という称号を持っている。

ちなみに黄金のマスクで有名なツタンカーメン王のお墓から見つかったシャブティは413体あり、そのうちの365体が労働者（1日に1体の計算で1年間）、36体が監督者（10日に1体）、12体が予備の監督者（1カ月に1体）とのことです⁶。

新王国時代のシャブティの表面には「死者の書（Book of the Dead）」として知られる葬送文書の第6章から抜粋された呪文が書かれることが多いのですが、大量生産のシャブティなどは呪文が全く書かれていないものや、シャブティの所有者（死者）の称号と名前のみ書かれているものが多いといわれています。先ほど紹介したツタンカーメン王のシャブティの場合、413体のうち29体に「死者の書第6章」の呪文があり、残りの384体は王名と称号のみが記されていたそうです⁷。



図5 ナパタ期のクシュ王シェンカマニスケンのシャブティ4体
(大英博物館所蔵) 筆者撮影

※シェンカマニスケンはタハルカの孫で、シャブティに関しては、質、量ともにタハルカに次ぐとされている。左2つはステアタイト、右2つは焼き物。
4体すべてに「死者の書第6章」から抜粋された呪文がある。

2. 3千年のエジプトの歴史と異民族の王

古代エジプトは紀元前3000年頃に上エジプト（エジプトの南部）と下エジプト（北のデルタ地帯）が統一され、国家が誕生するのですが、あまりエジプトに関心がない方は、ピラミッドやツタンカーメン、クレオパトラはご存じでも、それぞれ年代が違う、ということはご存じないかもしれません。有名なギザの3大ピラミッドの中で最も大きく最も古いピラミッドは古王国時代第4王朝のクフ王（2589–2566 BCE）⁸の時期に建てられたものであり、ツタンカーメン王（1336–1327 BCE）⁹はエジプトの歴史で最も華やかな新王国時

代第 18 王朝、そしてエジプト最後の女王として有名なクレオパトラ 7 世 (51–30 BCE)¹⁰ はプトレマイオス朝 (Ptolemaic period, 305–30 BCE) と、それぞれ 1000 年以上の隔たりがあります。

実際にエジプトへ行ったことのある方や、エジプト展などに出かけたことがある方の中には、どの遺跡、どの遺物も同じように見える（3 千年もの歴史があるのに違いが良く分からない）、と思った人がいるかもしれません。実際には時期ごとに様々な違い（特徴）が見られるのですが、神殿や彫像など、様々なところで同じような様式が踏襲され続けていることは驚きに値すると思います。

3 千年に及ぶエジプトの歴史では、中央集権制が崩壊した時期や、エジプト人以外の異民族による支配の時期もあります。クレオパトラのプトレマイオス朝もギリシア系の王朝ですし、私が関心を持っている第 25 王朝も、現在のスーザンのナイル川第 4 急湍のナパタ地域を中心としたクシュ王国の王が支配した時期です。少なくともこの 2 つの時期に関しては、異民族の支配時期ではありますが、彼らはエジプト王として国を治め、エジプトの神々を崇拝し、各地で神殿の建立などを行っています。

3. 第 25 王朝成立前

アラブ調査室で 2021 年 5 月に掲載された「スーザン遺跡紹介 1 回目」で、古代のスーザン地域を指す名称として、研究者は「ヌビア (Nubia)」という用語を使っている、と紹介しました。ヌビアは国の名前ではなく、地理的な領域を示す用語と考えてほしいとお伝えしましたが、そのヌビアのナパタ地域（ナイル川第 4 急湍の手前）で、おそらく紀元前 1000 年頃から徐々に力をつけていった国が、紀元前 716 年頃にエジプトの第 25 王朝を成立させたクシュ王国となります。なぜ「おそらく」という言葉を使っているのかというと、クシュ王国がいつ頃興ったのか、はっきり確認できる資料が無いからです。

エジプトの強力な中央集権制が機能していた中王国時代や新王国時代には、ヌビアは何度もエジプトの支配を受けており、ヌビアの地にはエジプトの神々の神殿が造られ、主要な町にはエジプト人の高官やエジプトに仕えていたヌビア人の役人などが住んでいました。ただ、中王国時代と同じ時期のヌビアには、ナイル川第 3 急湍のケルマ地域を拠点とする強大なケルマのクシュ王国¹¹がありましたので、エジプトの支配域は時期によって異なります。ヌビアの人々は文字を持っていなかったため、通常、私たちはエジプト側の文字記録からヌビアの情報を得ていますが、紀元前 1069 年頃、エジプトの中央集権制が崩壊し、第 3 中間期と呼ばれる混乱期に入ると、ヌビアに関する文字資料がほとんど見られなくなります。

北のデルタ地域を中心とした勢力と、南のテーベを中心としたアメン神官の勢力が、エジプトの北と南でそれぞれ王を擁立し、同時期に 2 つの王朝が誕生するなど 300 年ほど混乱が続きます。そのエジプトを統一し、再び中央集権制へと導くきっかけになったのが、ナパタ地域で興ったであろうクシュ王国の王で、第 25 王朝の基礎を築いたピアンキです。

ピアンキが彼の治世 21 年（紀元前 730 年頃か¹²）に下エジプトの勢力を制圧したという通称「戦勝碑 (JE48862)」(Great Triumphal Stela もしくは Victory Stela) が出るまで、エジプト側の情報がないことから、ナパタのクシュ王国の起源などははっきりしません。

この戦勝碑（図6）はクシュ王国の拠点であるナパタ地域の聖なる山ジェベル・バルカル（Jebel Barkal）の麓のアメン神殿B500に建立されていましたが、現在はカイロのエジプト博物館が所蔵しています¹³。縦184cm×幅180cm×厚さ43cmで上部が三日月形の大きな花崗岩製の記念碑には、表側の上部の左側にアメン神とムウト女神、右側にピアンキに助けを求める下エジプトのニムロトと彼の妻、馬、そしてピアンキに制圧された下エジプトの支配者たち（土下座している人々）が描かれています。この記念碑の主役のピアンキの姿は削れていて確認することはできませんが、削れた人物の上にピアンキの名前が確認できます。ただ、通常、神と人間と一緒に描かれる場面では、人間は神と対面するように描かれるのですが、この記念碑ではピアンキはアメン神に背中を向けて、ニムロトと対面するように描かれており、少々違和感があります。

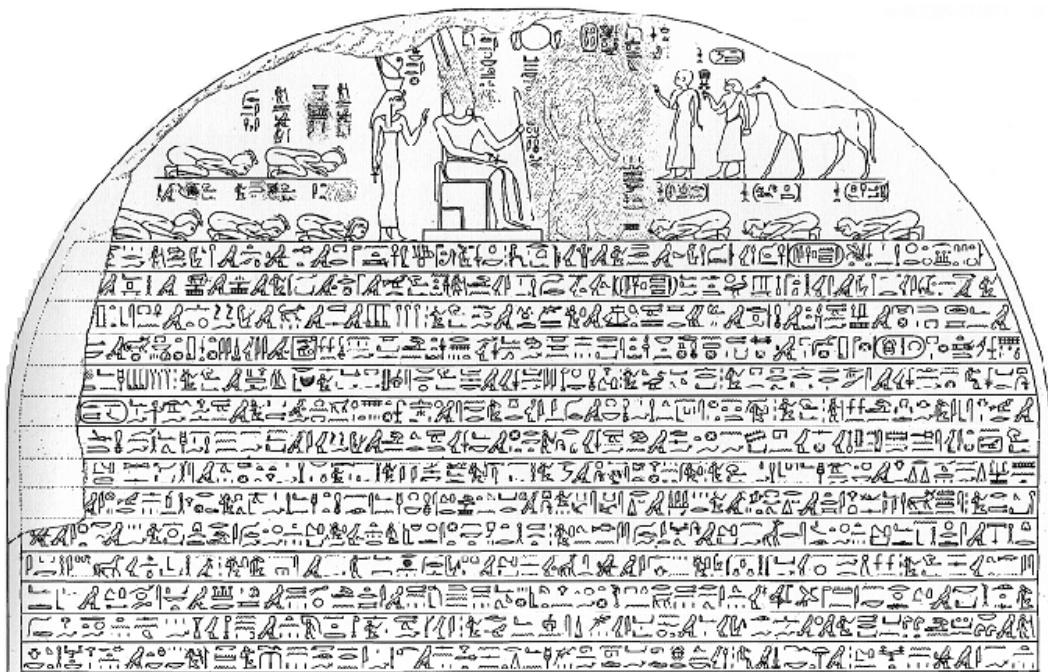


図6 ピアンキの戦勝碑

出典：Ancient Nubia (2012), p. 217, Fig153

※裏も横もエジプトのヒエログリフ（神聖文字）でクシュ王ピアンキが下エジプトに進軍することになった経緯などが刻まれています。

この碑文の注目ポイントの1つは、ピアンキの名前が歴代のエジプト王と同じようにカルトゥーシュ（Cartouche）と呼ばれる長円形の枠で囲まれ、ネスウト・ビティ（nswt-bity）と呼ばれる上下エジプト王の名前（上エジプト地域と下エジプト地域を統一した王であるという意味）で表されていることです¹⁴。この上下エジプト名でピアンキの名前が記されている碑文が他でも見つかっていることから、第25王朝の始まりはピアンキでも良いのではないか、と個人的には思っています。ただ、少し面白いと思うのは、ピアンキに助けられたニムロトと、ピアンキに制圧され土下座井をしている人々の中にも、カルトゥーシュで名前が囲われている人がいます。カルトゥーシュは通常、王の名前を囲むもので

すが、さらにそれらの人物の名前の前にはネスウトという「上エジプト王」と訳されるヒエログリフが記されています。土下座をしている人々は下エジプトの地域（地方）の王（支配者）たち、ということから、このネスウトは通常の訳ではなく、研究者は「地域の支配者」のように訳しているようです。

このピアンキの治世にエジプトの国家神であるアメンの崇拜が再びヌビアで行われ、それまでのヌビアの伝統的なベッド埋葬と、ミイラや棺、シャブティなど様々なエジプトの埋葬の要素を結合し、自らの墓の上部構造にピラミッドを採用するなど、ピアンキの時期にヌビアの埋葬様式が大きく変わります。ピアンキに続く第25王朝のクシュ王たちもエジプト王として、神々のために巨大な石造りの神殿をヌビアの地だけでなくエジプト国内にも建て、また既存の神殿の修復を行い、それまでのエジプト王と同じように柱や壁にヒエログリフを用いて王の名前や、王と神々との場面などを刻みました。

クシュ王たちの残した神殿のレリーフや
彫像などは、それ以前のエジプト王と同じ
ようにエジプトの伝統的な美術様式が見ら
れます。明らかに違う点もあります。壁
画や彫像などにエジプト王として描かれる
彼らはヌビア人の身体的特徴（狭い額や丸
みを帯びた鼻、厚い唇など）を強調し、特
徴的な装身具や歴代のエジプト王と異なる
「クシュのキャップ¹⁵」と呼ばれるかぶり
物を被るなど、自らのヌビア人としてのア
イデンティティを示そうとしているように
見えます。



図7 クシュのキャップを身に着けたタハルカ
(スーダン国立博物館所蔵) 筆者撮影

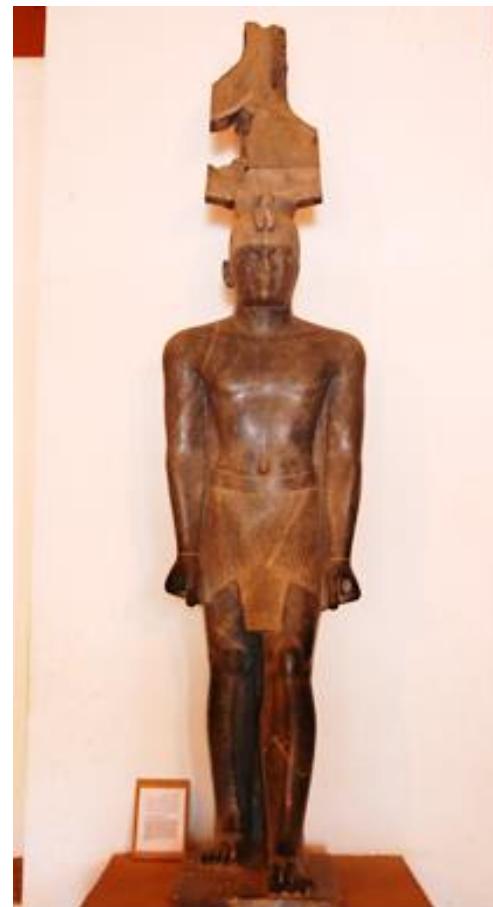


図8 タハルカ立像
(スーダン国立博物館所蔵) 筆者撮影

4. タハルカ王のシャブティ

第25王朝は4人の王があり、タハルカは3番目です。第25王朝の基礎を築いたピアンキや、タハルカ以外の第25王朝の王とその王妃たちは、ジェベル・バルカルから14kmほ

ど下流のクツル（El-kurru）というクシュの王墓地に墓を造っていました。

クツルにはクシュ王ピアンキよりもかなり古い時期の墓があり、クツルの発掘者であるレイズナー（George A. Reisner）はそれらにA～Eのアルファベットをあて、クシュ王たちに先行する祖先の墓と考えました。この祖先たちと第25王朝のクシュ王たちのつながりは現在のところ分かりませんが、タハルカはこのクシュの王墓地ではなく、クツルから直線距離で約22km上流の対岸のヌリに自分の墓を建造し、クシュ王国の新たな王墓地をスタートさせました。

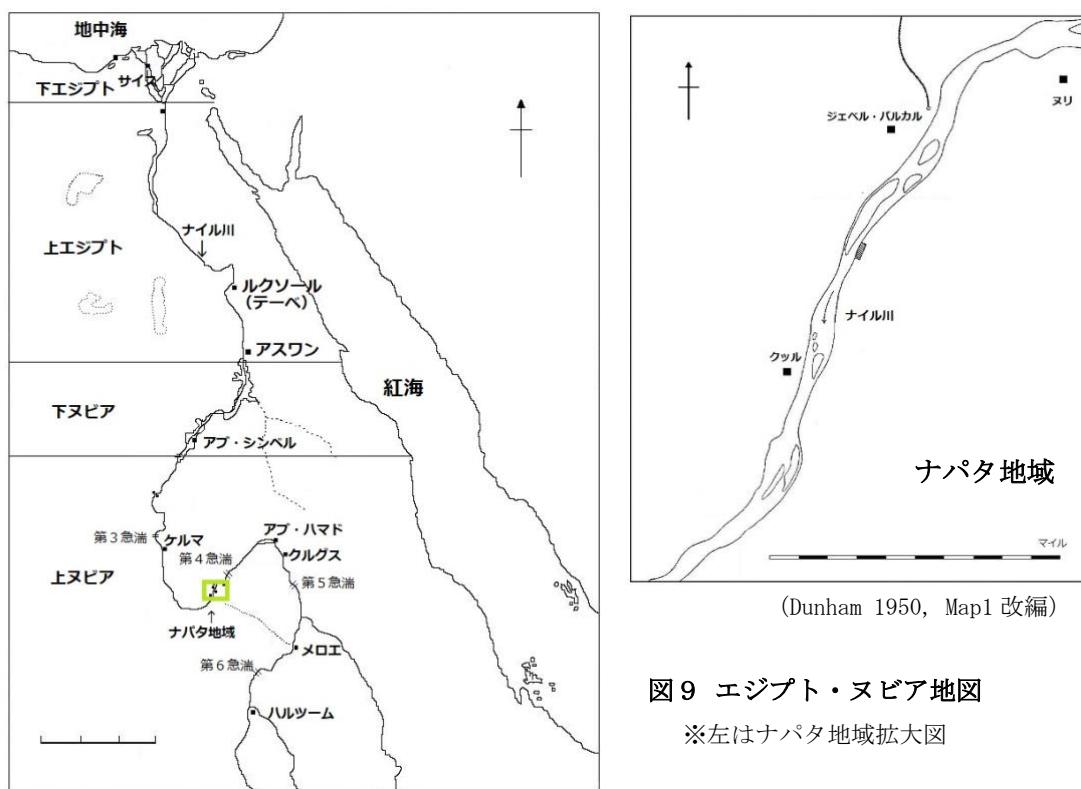


図9 エジプト・ヌビア地図

※左はナバタ地域拡大図

タハルカの墓はヌビアで一番大きなピラミッドで、現在はかなり崩れていますが、同じヌリに築かれたナバタ期の王たちのピラミッドと比べても、その大きさは際立っています。このタハルカの時期にヌビアではアメン信仰が更に強まり、埋葬に関してもそれ以前と比べエジプト化が一層進んだと考えられています。

先ほどツタンカーメンの墓から見つかったシャブティの数が413体だったとお伝えしましたが、タハルカの墓からは1070体以上のシャブティが見つかっています¹⁶。タハルカのシャブティは全て石製で、大きさや使われている石材の種類は様々ですが、全てのシャブティに死者の書の第6章の呪文が刻まれていることからも、タハルカの権力が強大であったことが伺えます。クツルに眠るクシュ王や王妃たちの墓からもシャブティが多く見つかっていますが、数、材質、デザインの精巧さ、出土の状況（シャブティの配置）など、全てにおいて違っています。

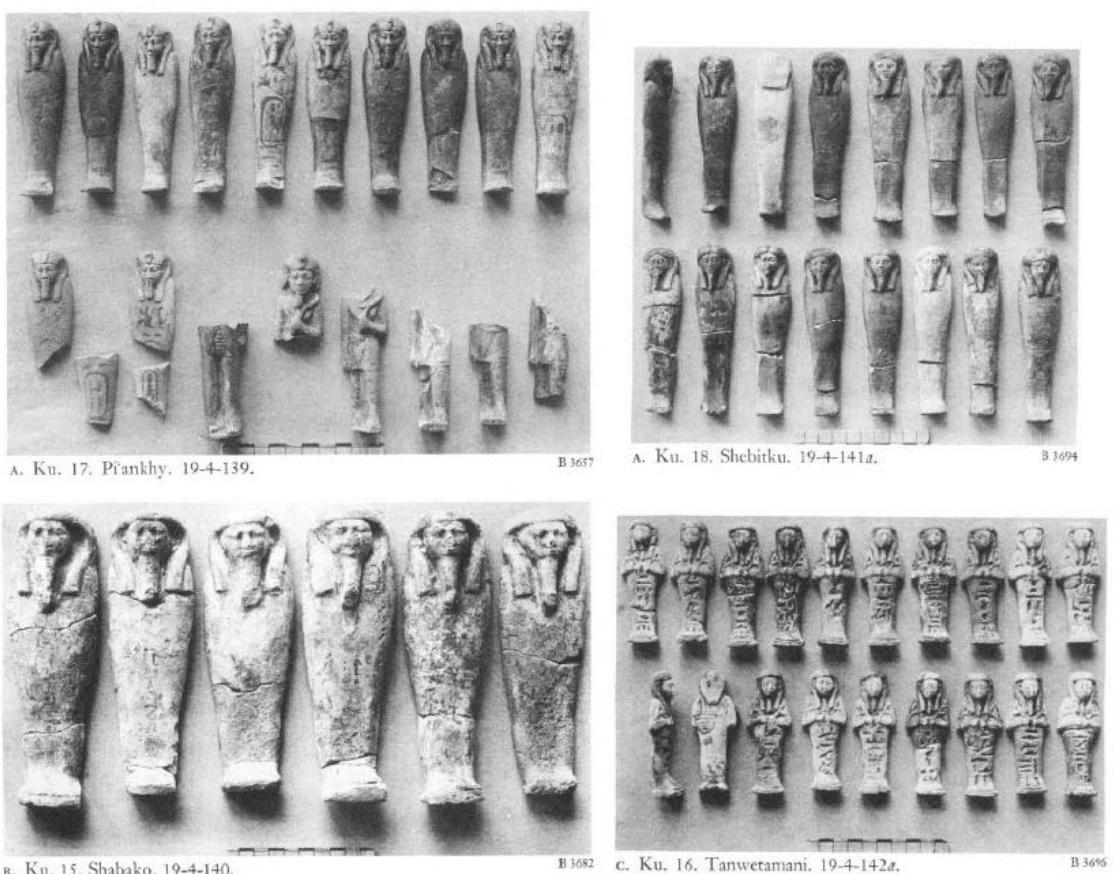


図10 クシュ王ピアンキ、第25王朝シャバカ、シャバタカ、タヌタマニのシャブティ
(Dunham 1950, Pls. XLIV-XLV 改編)



©Museum of Fine Arts Boston,
(Accession Number 20.215)

※ボストン美術館所蔵品。ホームページから検索可能。

図11 タハルカのシャブティ群（左）と「死者の書第6章」の呪文（右）

ただ、先ほどクシュ王たちは神殿のレリーフや彫像などで描かれる際、歴代のエジプト王と違ってヌビア人の身体的特徴と「クシュのキャップ」と呼ばれるかぶり物を身に着けた姿で描かれている¹⁷とお伝えしました。タハルカのシャブティに関しては、顔はヌビア人の身体的特徴を表現するなど、彼らの人物を表現する際の特徴をみることができます。いつもと違うのは「クシュのキャップ」ではなく歴代のエジプト王のシャブティと同じように「ネメス(Nemes)」や「カト(Khat)」と呼ばれるかぶり物を身に着けた姿で表わされている、という点です。このシャブティのかぶり物については、第25王朝の王やそれより後の時期のクシュ王たちのシャブティでも「クシュのキャップ」を身に着けているものは確認されていません。あれほど「クシュのキャップ」にこだわっているように見える彼らが、なぜシャブティでは「クシュのキャップ」を被っていないのか?ということが気になるのは、私だけではないよう思います。

エジプトの王冠に関するコリアー(Sandra A. Collier)の研究によれば、エジプト王は必ず何らかのかぶり物を着けた姿で表現され、それらのかぶり物は王権と関わり、その形や機能によって個々のかぶり物はそれぞれ特定の儀礼に対応していると考えられるそうです。ただ、彫像やレリーフ、壁画などを通してそれらのかぶり物の形が分かったとしても、飾り輪などを除けば実物が残っていることは無く、実際のサイズや材質などは不明だそうです¹⁸。エジプト王が被っているネメスとカトという布製のかぶり物は、互いに素材や形が似ているものではあるが、その機能については主に新王国時代の王墓における図像の分析から、ネメスは太陽神ラーと関連するものであり、生きている王を意味し、カトについてはあの世での生命の復活と関連するものと考えられ、死せる王を意味するものとし、両者は互いに補完しあうものと考えられるそうです¹⁹。

タハルカのシャブティはネメスとカトの2種類のかぶり物が見られることから、このコリアーの説明を当てはめると、1070体以上のシャブティは、生きている王(ネメスの姿)と、死せる王(カトの姿)という役割であると考えられます。しかし、シャブティの持ち主は亡くなった後にあの世でシャブティを利用する、ということを考えると、このコリアーの研究はシャブティには当てはまらないように思います。

タハルカのシャブティのかぶり物は、ネメスとカトの2種類しかありませんが、ツタンカーメンなどは上エジプトの象徴である赤冠、下エジプトの象徴である白冠、上下エジプ



©Museum of Fine Arts Boston,
(Accession Number 20.231)

※ボストン美術館所蔵品。

図12 ネメスを被ったタハルカ（左）と
カトを被ったタハルカ（右）

トの象徴である二重冠、クシュのキャップとの関連が指摘されている青冠（ケペレシュ）、ヌビア鬘、三部鬘など様々なものがみられるそうです²⁰。ツタンカーメンのように、ほぼ盗掘を受けていない王墓はエジプトではほとんど無いため、他の王たちのシャブティについては部分的にしか見つかっておらず、また、時代によってシャブティの意味合いも変わるために、それぞれのかぶり物にどのような意味があり、シャブティの中でどのような違いがあったのか、ということを知るのは難しいかもしれません。

ヌビアにあるタハルカやその孫のシェンカマニスケン王の墓から見つかったシャブティは、どちらも1000体を超えていましたが、その出土状況はエジプトとは明らかに異なります。ツタンカーメンの場合はシャブティ専用の箱などがあったようですが、タハルカやシェンカマニスケンの場合は、埋葬室の壁に三重に並べて置かれていたようだ、とのことです²¹。

シャブティはエジプトの死生観を反映する品の1つであることは間違いないのですが、小さな人形が一生懸命あの世でご主人のために働いている姿は非常にいじらしい、と想像してしまい、私ならシャブティをお墓に入れないな、など思ってしまいます。

通常、クシュ王たちはクシュのキャップと呼ばれるかぶり物を被った姿で表されるとお伝えしましたが、実は意外とネメス頭巾を被った姿の彫像や壁画があります。最後にクシュのキャップ以外のかぶり物を被ったタハルカとクシュ王の姿をいくつかお見せしたいと思います。



図13 クシュのキャップ以外のかぶり物

- ①右上：ネメス頭巾のタハルカ
- ②右下：羽飾りのついた冠のタハルカ
- ③二重冠を被ったクシュ王（名前不明）
- ※①と②はスーダン国立博物館、③はジェベル・バルカルのB300神殿 全て筆者撮影

おわりに

私が関心を持っているクシュ王国について、もっとみなさんに知っていただけるように今回は墓の副葬品を取り上げました。タハルカ王のシャブティは数が多いため、世界中の美術館や博物館で所蔵しています。大きさや石材も様々なため、中年や老年の表情など1つ1つの表情が違っていて、とても面白いと思います。今は大英博物館やボストン美術館など海外の主要な博物館・美術館はインターネットで所蔵資料の検索ができ、画像のダウンロードもできるので、本当に便利です。ただ、やっぱり本物も見たいので、いつか世界中のタハルカのシャブティを見に行けるようになるといいな、と思っています。タハルカのシャブティは日本に来ることはありませんが（渋谷の古代エジプト美術館というところで所蔵しているという噂もありますが）、日本で開催されるエジプト展には第25王朝の品もよく来ていますので、みなさんも機会があればエジプト展に行ってみてくださいね。

参考文献

- Bruce B. Williams, “Chapter 22: The Napatan Neo-Kushite State 1”, in Emberling & Williams (eds.), 2020, 411–432.
- Sandra A. Collier, *The crowns of Pharaoh: their development and significance in ancient Egyptian kingship*, Ph.D. dissertation, UCLA, 1996.
- Ahmed Sami Al-Deeb, “A shabti of king Taharqa”, *Shedet: annual peer-reviewed journal issued by the Faculty of Archaeology, Fayoum University*, vol. 7, 2020, 97–114.
https://shedet.journals.ekb.eg/article_137709.html (accessed March 21, 2022)
- Dows Dunham, *El Kurru* (The Royal Cemeteries of Kush Vol. 1; Boston, Harvard University Press 1950).
- Dows Dunham, “Royal Shawabti Figures from Napata”, *Bulletin of the Museum of Fine Arts*, vol. 149 no. 276, 40–48.
- Dows Dunham, *Nuri* (The Royal Cemeteries of Kush Vol. 2; Boston, Harvard University Press 1955).
- Geoff Emberling & Bruce B. Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 2020.
- Hans Goedicke, *Pi(ankh)y in Egypt: A study of the Pi(ankh)y stela*, Halgo, INC, Baltimore, 1998.
- Sherif Saied El-Sabban et al., “The Foreign Influences on Royal Statuary During the Kushite Period 25th Dynasty”, *Minia Journal of Tourism and Hospitality Research*, vol. 10(1), 2020, 81–104.
https://mjthr.journals.ekb.eg/article_139536.html (accessed March 24, 2022)
- Hans D. Schneider, *Shabtis: an introduction to the history of ancient Egyptian funerary statuettes, with a catalogue of the collection of shabtis in the National Museum of Antiquities at Leiden*, (Collections of the National Museum of Antiquities at Leiden. Vol. 2; Leiden, Rijksmuseum van Oudheden, 1977).
- Yvonne J. Markowitz & Denise M. Doxey, *Jewels of Ancient Nubia*, (MFA Publications /

Museum of Fine Arts, Boston, 2014).

Mahmoud El-Tayeb, “Chapter 36: Post-Meroe in upper Nubia”, in Emberling & Williams (eds.), 2020, 731–757.

Janice. W. Yellin, “Chapter 29: The Royal and Elite Cemeteries at Meroe”, in Emberling & Williams (eds.), 2020, 563–588.

イアン・ショー & ポール・ニコルソン著, 内田杉彦訳, 『大英博物館古代エジプト百科事典』, 原書房, 1997年

ニコラス・リーヴス著, 近藤二郎訳, 『黄金のツタンカーメン』, 原書房, 1993年

和田浩一郎, 『古代エジプトの埋葬習慣』, ポプラ社, 2014年

¹ 第25王朝の年代については、クシュ王の誰を最初とするかで年代が変わり研究者間で相違がある。以前は第25王朝の基礎を築いたピアンキ (Pianky, もしくはピイ Piy) から第25王朝としていたが、現在はピアンキの次の王の時期からとするのが多いようである。ピアンキの次の王についてはシャバカ

(Shabaka, もしくはシャバコ Shabako)、シャバカの次の王をシャバタカ (Shabataka, もしくはシェビトコ Shebitku) とするのが定説であったが、近年の研究によりシャバカとシャバタカの順序が逆になることが示され、議論を巻き起こしている。ヌビア研究の最新の論考を多く載せている「The Oxford Handbook of Ancient Nubia」(Oxford University Press, New York, 2020) では、編者の1人ブルース・ウィリアムズ (Bruce B. Williams) が、同本に収録されている自らの論文の中で、ピアンキの次の王はシャバタカとしている (B.B. Williams, 2020, p. 420)。

² タハルコ (Taharqa) とも呼ばれ、「The Oxford Handbook of Ancient Nubia」など最新の研究書を参照すると、タハルコで統一するなど、最近はこちらの呼び方のほうが良く使われているようである。ただ、クシュ王たちの名前に関しては、エジプトのヒエログリフで記載されていることもあり、基本的に子音しか表記されない以上、どちらが正しいか（どちらも間違っている可能性も十分ある）は分からぬ。クシュ王たちの墓を発掘したライズナー (A. Reisner) などは「タハルカ」という呼び名を使っており、筆者もエジプト語の文字の最後の子音を便宜的に補う母音は「O (オー)」より「A」のほうが良いと考えていることから、「タハルカ」という呼び名を使っている。

³ シャワブティ (shawabti) や、第3中間期の第21王朝 (1069–945 BCE) からはウシャブティ (ushabti) とも呼ばれる (Schneider 1977)。

⁴ 「大英博物館ミイラ展：古代エジプト6つの物語」は神戸市立博物館で2022年5月8日まで、「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」は福岡（2022年3月12日～6月19日）と札幌（2022年7月10日～8月21日）で開催される。

⁵ Schneider 1977, pp5–6.

⁶ リーブス 1993, pp232–236. –

⁷ リーブス 1993, p232. –

⁸ クフの年代は大英博物館のホームページで公開されている年代を使用した。

<https://www.britishmuseum.org/collection/term/B10G54242>

⁹ ツタンカーメンの年代は大英博物館のホームページで公開されている年代を使用した。

<https://www.britishmuseum.org/collection/term/B10G56461>

¹⁰ クレオパトラの年代は大英博物館のホームページで公開されている年代を使用した。

<https://www.britishmuseum.org/collection/term/B10G57627>

¹¹ 紀元前2500年～1500年頃にナイル川第3急湍のケルマ地域で栄えたクシュ王国と、第25王朝のナバタ地域のクシュ王国を直接関連付ける証拠はない。しかし2000年代以降の発掘調査では、ケルマ期の墓がナイル川第4急湍だけでなく、第5急湍との中間地点のアブ・ハマド (Abu Hamed) 辺りでも多数見つかっており、ケルマのクシュ王国の支配域は以前に考えられていたより広いことが分かっている。

¹² このクシュ王ピアンキの戦勝碑は、上下エジプトを統一し、第25王朝の基礎となつた出来事であり、非常に重要ではあるが、年代ははつきりしない。今回はHans Goedickeの年代を使用したが、年代については研究者間で異なると思われる。Goedicke 1998, p. 6.

¹³ カairoのタハリール広場にあるエジプト博物館から多くの遺物が3大ピラミッドのあるギザに新設された「大エジプト博物館 (The Grand Egyptian Museum)」に移っている（開館は予定より大幅に遅れ、2022年3月現在、2022年11月予定となっている）。そのためこのピアンキの戦勝碑が今後どちらの博物館に置かれるのか分からぬ。

¹⁴ この下エジプトへの進軍をする前に、すでに上エジプトはクシュ王国の支配下にあったのではないか、ということが断片的な資料を基に多くの研究者が推測しています。ピアンキの先代の王カシュタの治世にはエレファンティネ辺りまで支配していた可能性があり、またカシュタの娘がテーベで「アメンの神妻」(God's wives of Amen) という重要な役職に就いていることなども根拠とされている。

¹⁵ もともと古王国時代の王冠の一つであった「キャップ」から発生し、新王国時代の「ケプレシュ」と呼ばれるキャップタイプの王冠との関わりが指摘されている。しかし、このクシュ王たちのかぶり物が古代エジプト語でなんと呼ばれていたのかは不明である(Collier 1998 p. 108)。この「クシュのキャップ」はエジプトの王朝では第25王朝のみ現れる特殊な王冠であるが、ナパタ地域ではエジプトから撤退した後もナバタやメロエのクシュ王たちの王冠として継続する。

¹⁶ 発掘報告書では少なくとも1070体と記述されているが(Dunam 1955 p. 10)、Joyce Haynesは1122体以上あった可能性を示しているとのことである(Al-Deeb 2000 p. 98)。

¹⁷ コリアーは歴代のエジプト王と同じ「アテフ冠」や「ネメス」など、「クシュのキャップ」以外の様々な王冠を被ったクシュ王の図を多数挙げている。コリアーはラスマン(Edna R. Russmann)の「The Representation of the King in the XXVth Dynasty」(1974)の情報を基にしているが、コリアーの論文だけでは、どこの遺跡のレリーフなのか、どの王の彫像なのかという重要な情報が抜けていた。しかし、同じラスマンの論文の図に言及しているSherf Saied El Sabban等の論文から、第25王朝の王シャバカであることが分かった。

¹⁸ Collier 1996, pp. 148–150.

¹⁹ Collier 1996, pp. 90–91.

²⁰ リーブス 1993, p236.

²¹ どちらの墓も盗掘されており、シャブティ以外のものはそれほど見つかっていない。ただ、シャブティについては、埋葬室の壁に沿って2列か3列で並んで置かれていたようだ、とのこと。